1965

BARON－RENOUARD

バロン・ルヌワール個展

BARON－RENOUARD

バロン・ルヌワール個展

1965

11月9日–14日

東京・日本橋
高島屋
6階美術部画廊

撮影　坂本 守

バロン・ルヌワール氏を迎えて

富永惣一

バロン・ルヌワール氏は日本を心から愛し本当に日本人を理解しているフランスの画家である。生来　温情の人で会をつくれば会のために　友人にあえば友人のために献身的につくすという情熱の芸術家である。フランスのサロン・ドートンヌの会員として　すでに旧いが　単なる会員ではなくてこの団体のために心をこめて尽力した功績は決して少なくない。古い歴史をもつこの団体がとかく古きに沈み易いのを愛いて　1961年抽象美術の部屋を開設して　新鮮な気風をひき立てたのも　バロン・ルヌワール氏であったし　その他イヤバー(国際美術家連盟)の書記長をつとめ　労を惜しむことなく　懇切な世話をつくされることは万人のひとしく認めるところである。
来日は　今回で二度目であったかと思うが　その都度日本の自然を愛しては　その中から深い感動を受けとって自己の芸術の内容を豊かにしてゆくのである。また日本の古来の芸術の美しさには　いちいちこまやかな共感を抱いて　限りない敬意を片時も忘れない。したがって　いつとなく　ルヌワール氏の芸術創造の中には　日本の香気がしんみりとふくまれていったようである。
氏の柔和な感性は　日本の美しさに触れて自然に　その滋養を吸収していったとも思える。
ともかく　フランス的感覚と日本的美の感性とがどのように接し　どのように結んで　どのように新しい芽をふいてゆくかわれわれも興味をもっている。今度の展覧会がとくに日本で催され　その成果を身近かに　見ることは大変嬉しいことである。遠来の客を迎え　その新しい仕事を　ゆっくり見ていただきたいと思っている。

バロン・ルヌワールの個展を迎えて

柳　亮

バロン・ルヌワールは　アンリ・ガリ＝カルルが　今日の絵画の二大路線のひとつにかぞえ　“想念的な抽象的自然主義”と呼んでいるフランスの抽象派の第３グループに属する画家で　ル・モール　ヘイター　コルネイユ　ジャン・クーインなどとともに　パリ画壇の第一線を担って精力的に活躍している中堅のひとりである。

ガリ＝カルルは　このグループの芸術をとくに“想念的自然主義”と呼ぶ理由を定義して次のように言っている——彼らは自然や外界をインスピレーションの主たる源泉とし　外界との接触による感覚上のさまざまな反応を純粋に主観的なしかたで　作品の中へ顕現させようと望んでいる。彼らの感覚の記憶の頁に記録されたそれらの反応は　内的な自我のふるいにかけられ　純化された後精神的な個性のチャンネルによって再現されると——。

バロン・ルヌワールは　まさに　その言葉通りの典型的な画家だということができる。彼は数年前に日本を訪れこの国の美しい自然の情趣をふかく心に刻んで帰った。以来彼はその感銘の再創造を心がけ　1963年には「広重への頌」を発表して注目されたが　彼の芸術する態度はこの一事に端的にしめされている。

自然主義の名は冠されても　モチーフを前にしてその外観を写そうとするものではなく　ただ霊感の源泉をそこにもとめているだけで　抽象的な言語によって当世風に綴られる彼の絵には　自然の視覚的な叙述はないが　しかも複雑微妙な色彩の象徴的駆使によって　彼はリリックな自己の情感を伝達し　心情の微細な動きまで読みとらせる不思議な魔術を身につけている。この作家の本質のうちに抱かれている鋭敏な感受性と　稀に見るキメのこまかい芸術の特質がそこに立証されていると思うのである。

彼は言う——私が好むのは描写よりも暗示だ。パリには同じように具象と非具象の裂け目の中でこの困難な実験を続けている同志がすくなくとも10人はいる。それが私には救いである——と。

今を去る15年前　炯眼のジャン・ブーレは　その真率な制作態度に眼を止め——“この青年画家は　トリックや安易さを若さの特権とせず　仕事をおろそかにせぬ画家の一人だと　アール紙の論評の中で折紙をつけているがこの易きにつかぬ態度の謙虚さと美しいものへのふかいいたわりこそ彼の芸術の基本をなすものであり　それはまた著名な画家兼版画家として聞えたポール・ルヌワールを祖父にもつ彼がその血統のうちに抱いている本質的な気質でもあったのである。

バロン・ルヌワールは1918年　ブルターニュのヴィトレで生れた。画技を修めたのは国立高等工芸学校であるが卒業すると間もなく第２次世界大戦に際会　動員されて軍務に服し　空軍将校として７年間　北アフリカやアルサスの戦線で青春をすごした　という画家としては数奇な経歴のもち主で　この体験は彼の人間形成や芸術にとって　小さからざる捨て石になっているように私には思える。

精悍で不屈の闘志をもち　エネルジックに多方面で活躍をつづけている現在の彼の精力的な活動家としての一面は　おそらくそういう特異な人生体験によって鍛えられたものであろう。また彼の芸術を特質づけている流動的な光や大気に対する人一倍鋭敏な感覚的反応も　そうした彼の内的経験と無関係ではないような気がする。

彼が作家として画壇に踏み出したのは40年代の末からで　1948年　ヴェニスの市長賞を獲得して脚光を浴びたのが第一歩である。以来彼はサロン・ドオトンヌ　サロン・ド・メエ　サロン・コンパレーゾン　ダール・サクレ等各種のサロンやグループ展に参加し　個展もフランス及び欧米の各地で殆んど例年のように開催して今日にいたったのであって　その間　いくつかの受賞を重ね

その作はパリの近代美術館をはじめフランスやアメリカ各地の美術館に納められて　中堅作家としての確定的な地位を築いてきたのである。

現在彼はサロン・ドオトンヌの芸術委員に上げられ戦後ようやく老化現象の目につきはじめた由緒あるこのサロンの体質改善に重要なひと役を買い若い世代のために道を拓いたり　ユネスコに本部をもつ国際造形美術協会(I.A.P.A)のフランス部の書記長として　国際的な活動に任じたり　その他ステンドグラスの制作には早くから独自の装飾的手腕を振い　現にナンシイの国立病院と国際競技場を飾る作品の制作を続行中と聞いている。

バロン・ルヌワールの来日は　今回は　二度目で　1960年に二科会と共催で東京で催されたサロン・コンパレーゾンのパリ賞の審査のため日本を訪れたのが最初である。その時　私は初めて面識を得たのであるが　翌年の61年には　私がパリを訪れる廻り合わせとなり　アルバレット街のアトリエへ招かれて手厚い歓待を受け　親しくその仕事ぶりも見せてもらった。その時も　仕事が思うように捗どらぬので出来上った作がなく貴方の腹蔵のない意見を聞けないのが残念だと言いながら　制作中の数点を陳べて見せ　意にみたぬ個所を自分で指摘し　制作上の悩みをいろいろと率直に語ってくれた。私はその良心的な態度に多大の共感をおぼえ　この作家の前途に残された未顕の可能性を信じて辞去したのであるが　前述の易きにつかぬという印象はその時私の受けとった実感であった。

こんどの来日はフォーブ60年展のフランス側を代表し事務総長として5年ぶりにふたたび日本の土を踏むことになったもので　フォーブ展がかくもみごとな充実した内容のものとなり　しかも地元のフランスに優先して日本でまず開催できた――パリではそのため来年1月までもちこされることになったが――そのかげには事務総長としての彼の献身的尽卒があった賜ものだと聞いている。言うまでもなく　彼の底知れぬ好意はすべて日本に対する愛情につながるものだが　この機会に　平素のじぶんの仕事も　熱愛する日本の皆さんに見てもらいたいという彼の希望が実現し　こうして個展開催の運びになったことを私は誰れにもましてこころから喜び　誌して祝福の言葉とする次第である。

1
光る湖
Le Lac ébloui

BARON-RENOUARD

Sept années passées dans le corps des Officiers de l'air, durant la dernière guerre, ont particulièrement rendu BARON-RENOUARD sensible: à l'atmosphère fluide des régions survolées, vues à perte d'horizon du haut de quelques milliers de mètres d'altitude, au souffle et à la grandeur de la nature; sensations que l'on retrouvera dans une oeuvre que est dominée par ce sens aigü de la dimension cosmique, imprégnant, presque malgré eux, ceux qui ont pratiqué l'aviation.

Si ces causes permettent de mieux saisir les caractéristiques de l'oeuvre de cet artiste, ce n'est certes pas immédiatement qu'il est parvenu à son expression picturale actuelle, mais après une longue évolution, qui, figurative au début, devint progressivement représentative de ce que nous appelons le "Naturalisme Imaginaire Abstrait", l'une des deux plus importantes lignes de forces, avec le "Subconscientisme", de la peinture post-abstraite formelle.

En effet, certains artistes après l'abstraction pure, éprouvèrent la nécessité de revenir au sujet, à la nature plus précisément, d'où le terme de "naturalisme" qui détermine exactement une source d'inspiration spécifique; soulignons qu'il ne s'agit nullement d'un retour à la conception classique, l'évolution des cinquante dernières années l'interdisant, mais à une re-appréhension ne pouvant se manifester que par le canal de l' "imaginaire", signifiant que l'artiste ne se mettant plus devant le motif, ne peut le recréer qu'en projetant sur la toile l'ensemble des sensations perçues antérieurement, face à ce motif ou au paysage: sensations tactiles, olfactives, visuelles, auditives, transformées par le psychisme, après avoir été enregistrées par la mémoire, puis décantées grâce à l'alchimie de la subconscience, enfin, retranscrites en toute originalité.

Quant au terme "abstrait", il signifie que l'écriture employée est directement issue de l'écriture abstraite.

Ainsi peut-on cerner plus clairement encore la morphologie de l'art de BARON-RENOUARD, comme le situer, par rapport à l'évolution de la peinture contemporaine.

Le "paysage", donc, principale source d'inspiration de BARON-RENOUARD, particulièrement le paysage nippon, ressenti avec acuité lors d'un précédent voyage durant lequel il accumula une somme de sensations qui le hantent depuis, et qu'il recrée au travers de sa parsonnalité d'homme occidental, mais permettant cependant de retrouver la fluidité d'une atmosphère l'ayant touché, qui domine toutes ses toiles, sans aucune superpositions de sensations, mais au contraire avec une intégration subtile de celles-ci provoquant une impression de non-limite, correspondant à sa vision d'aviateur et à son sens de la liquidité cosmique, dénominateur commun de tous les éléments apparemment hétérogènes composants l'univers; or, cette fluidité, BARON-RENOUARD l'obtient en créant une lumière translucide grâce à l'emploi de couleurs raffinées, bleues, mauves, grises, jaunes, auxquelles s'ajoutent des harmonies brunes ou noires qui soulignent les différentes structures des oeuvres, mettant en relief et leur équilibre stato-dynamique et leur unité, expliquant la raison pour laquelle son oeuvre, transgressant la manifestation physiologiquement simple de la joie de vivre ou de la souffrance exagérément tragique, révèle: pondération, unité, force, démontrant qu'il est en pleine possession de ses moyens d'homme et de peintre, qu'il sait dominer ses mouvements psychiques immédiats, ne laissant filtrer nulle sensation non conforme à sa personnalité

Quant au terme "abstrait", il signifie
que l'écriture employée est directement issue
de l'écriture abstraite.
Ainsi peut-on cerner plus clairement encore
la morphologie de l'art de BARON-RENOUARD,
comme le situer, par rapport à l'évolution
de la peinture contemporaine.
Le "paysage", donc, principale source d'inspiration
de BARON-RENOUARD, particulièrement
le paysage nippon, ressenti avec acuité lors
d'un précédent voyage durant lequel il accumula
une somme de sensations qui le hantent depuis,
et qu'il recrée au travers de sa parsonnalité
d'homme occidental, mais permettant cependant
de retrouver la fluidité d'une atmosphère
l'ayant touché, qui domine toutes ses toiles,
sans aucune superpositions de sensations,
mais au contraire avec une intégration subtile
de celles-ci provoquant une impression de non-limite,
correspondant à sa vision d'aviateur
et à son sens de la liquidité cosmique,
dénominateur commun de tous les éléments
apparemment hétérogènes composants l'univers;
or, cette fluidité, BARON-RENOUARD l'obtient
en créant une lumière translucide grâce
à l'emploi de couleurs raffinées, bleues, mauves,
grises, jaunes, auxquelles s'ajoutent des harmonies
brunes ou noires qui soulignent les différentes
structures des oeuvres, mettant en relief
et leur équilibre stato-dynamique et leur unité,
expliquant la raison pour laquelle son oeuvre,
transgressant la manifestation physiologiquement
simple de la joie de vivre ou de la souffrance
exagérément tragique, révèle: pondération, unité,
force, démontrant qu'il est en pleine possession
de ses moyens d'homme et de peintre,
qu'il sait dominer ses mouvements
psychiques immédiats, ne laissant filtrer
nulle sensation non conforme à sa personnalité
d' "homme conscient" qui cherche avant tout:
harmonie, densité, équilibre, maîtrise.
Artiste solide, sûr, BARON-RENOUARD,
un des meilleurs représentants
du "Naturalisme Imaginaire Abstrait",
comme un des peintres les plus typiquement français
par la forme de ses qualités.

Henry GALY-CARLES

バロン・ルヌワールについて

アンリ・ガリ＝カルル

第二次世界大戦のとき　空軍将校団で過した7年の歳月が　バロン・ルヌワールを　次のものに対して　特別感じやすくさせた。すなわち　彼が飛行する何千メートルもの高さから地上の土地の上に流れる大気　自然の大きさと　その息吹きである。それは　飛行機に乗った人は誰でも影響を受ける　あの宇宙次元の鋭い感覚に支配された作品を前にして　人が感じる感動である。

しかし　この芸術家の作品の性格をとらえやすくするこれらの原因が　彼をして　現在の絵画表現に一気に到達させた　というわけではない。そこには　出発時には象形的でありながら　次第に　絶対抽象絵画の「潜在意識主義」と並んで二本の力強い線の一本である「想念的な抽象的自然主義」と呼ばれるものの代表となるまでの進展の長い道程がある。事実　純粋抽象化の後で　若干のの芸術家たちは　主題　正確にいうならば　特有な暗示原を正確に規定する「自然主義」という用語を生んだ　あの自然に立戻る必要性を感じた。これは　過去50年の進展が禁じて来た　標準型着想に戻る　ということではなく　空想の力を通して　自己を現わし得る考え方に戻ることなのである。つまり　芸術家は　モチーフの前に身を置くべきではなく　そのモチーフの前に身を置くべきではなく　そのモチーフなり風景なりに向かう以前に知覚した感動を画布の上に投げつけることによってのみそのモチーフを再創造し得るということなのである。それは　触感　嗅覚　視覚　聴覚　心霊論などによって変形され　記憶によって記録され　潜在意識の練金術で傾注され　最後に完全な独創性に変わる感動である。「抽象」という用語は　使用された表記法が　直接　抽象表記法から出ていることを意味する。

こうして　現代絵画の進展の中への位置づけとしても　バロン・ルヌワールの芸術の形態を　さらに明確に把握することが可能となるのである。

バロン・ルヌワールのインスピレーションの主軸をなすものは「風景」　特に　前回の旅行のおりに鋭く感得した　日本の「風景」である。この旅行の間に　彼が得た一連の感動は　以来　彼の心底を離れない。彼は　自己の画布を支配する　あの感動的な大気の流れに再び会い西欧人としての性格を通して　その感動を再創造して見せたのである。それは感動のつみ重ねといったものではなく　果てしない空間の印象を与える感動の緻密な統一のもとでの再創造である。それは　飛行家としての彼の空想　宇宙の流れに対する彼の感覚に相通じ　宇宙を形成する異質的要素の共通分母となるものである。バロン・ルヌワールは　何種類かの洗練された色彩を使って一つの不透明な光を作り　この流れを自己のものとしている。青色　黄色　灰色　黄色等に　作品のそれぞれの構成を強調する　黒色や茶色による調和が加えられ　作品の固定力学的な均衡と単一性を浮きぼりにして　作品の存在理由を説明している。彼の作品は　過度に悲劇的な悩みや　生きるよろこびなどの　生理学的に単純な表現には背を向け　均衡　単一性　力強さを表白して見せる。彼は　人間として　画家としての才能を十分に持っているが　即座的な精神の動きをおさえ　まず第一に調和　密度　均衡　抑制を探究する「意識人間」としての性格に符合しないような感動は入りこませない。

堅固にして確実な芸術家　バロン・ルヌワールは「想念的な抽象的自然主義」の代表的な一人であり　その特質的な形によって　典型的なフランスの画家の一人である。

参考文献

アール　ザ スタヂオ

コネサンス デ ザール

オーデュールドウィ

プリスム デ ザール

2
ブルターニュの風景
Paysage de Bretagne

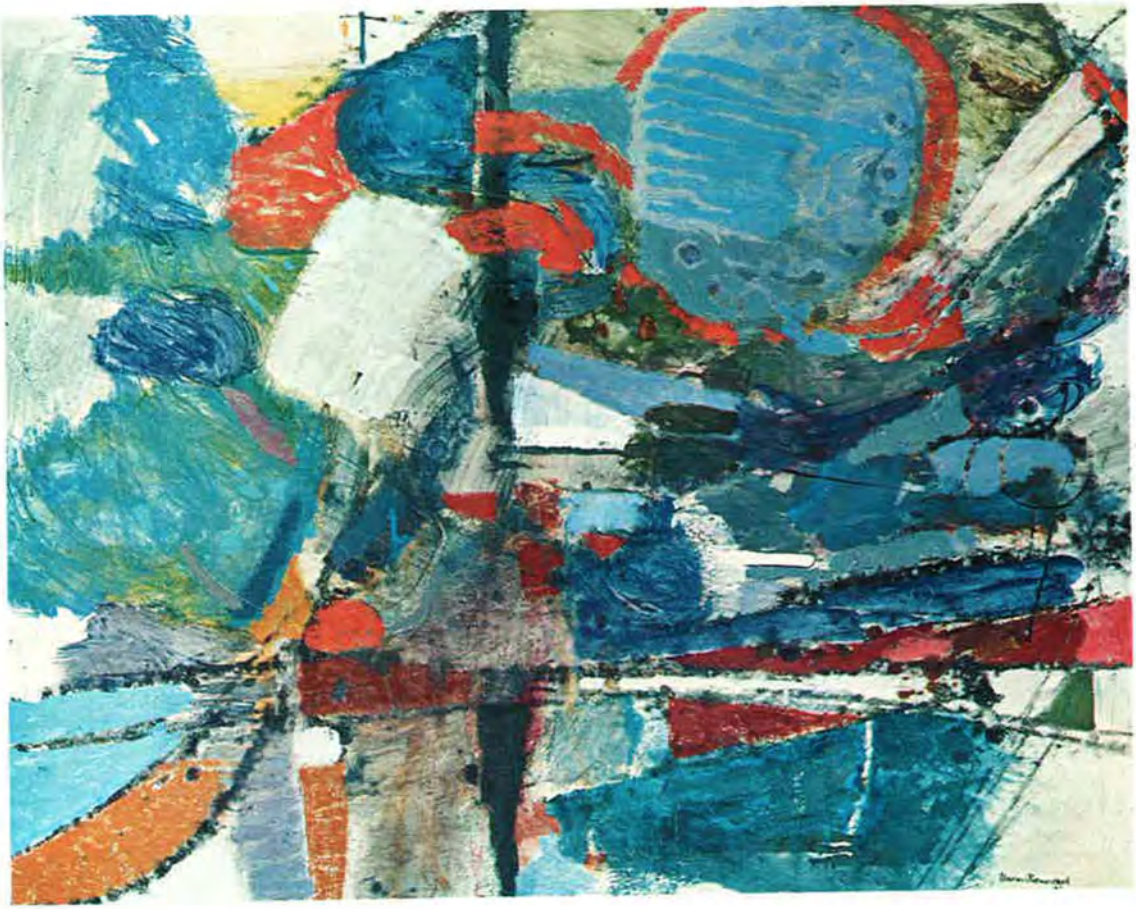
3
青のめざめ
Eveil bleu

4
小みち
Petit Paysage

8
広重讃歌
Hommage à Hiroshigé

6
イカルス
Icare

7
谷えの降下
Descente sur la Vallée



5
花火
Feu d'artifice

9
孤独
Solitude

10
無限の道
Chemin de l'infini

11
五月のピンク
Rosée de Mai

12
田舎の祭り
La Campagne en Fête

13
心の実在
Réalité Intérieure

14
海辺の夜
Nuit Maritime

15
秋のささやき
Murmure de l'Automne

16
詩人の風景
Paysage du Poète

17
ヨット
Voile

18
変化する世界
Le Monde change

19
聖なる夜明け
Aube vierge

20
飛翔
Envol

21
目覚める大地
La Terre se Lève

22
創造
La Création

23
絵画
Peinture

24
フォーブの船
Bateau “Fauve”

25
コンポジション
Composition

26
風雪の野
Plaine du vent sous la neige

作品リスト

1
光る湖
Le Lac ébloui
150×150

2
ブルターニュの風景
Paysage de Bretagne
81×100

3
青のめざめ
Eveil bleu
80×80

4
小みち
Petit Paysage
37×35

5
花火
Feu d'artifice
73×92

6
イカルス
Icare
100×100

7
谷えの降下
Descente sur la Vallée
100×100

8
広重讃歌
Hommage à Hiroshigé
110×200

9
孤独
Solitude
81×65

10
無限の道
Chemin de l'infini
100×60

11
五月のピンク
Rosée de Mai
73×92

12
田舎の祭り
La Campagne en Fête
73×92

13
心の実在
Réalité Intérieure
73×92

14
海辺の夜
Nuit Maritime
80×80

15
秋のささやき
Murmure de l'Automne
80×80

16
詩人の風景
Paysage du Poète
27×35

17
ヨット
Voile
27×35

18
変化する世界
Le Monde change
92×73

19
聖なる夜明け
Aube vierge
92×73

20
飛翔
Envol
50×100

21
目覚める大地
La Terre se Lève
65×81

22
創造
La Création
140×187

23
絵画
Peinture
60×60

24
フォーブの船
Bateau "Fauve"
60×60

25
コンポジション
Composition
92×73

26
風雪の野
Plaine du vent sous la neige
81×100

バロン·ルヌワール，フランソワ

BARON-RENOUARD, François

アトリエ:パリ5区アルバレート街32番地
TEL:POR 64-56

1918年4月19日　ブルターニュ　ヴィトレの石版画家ポール・ルヌワールの末子として生まる。フランス国立高等工芸学校卒業。
1939年　第二次大戦に航空士官として北アフリカ　アルザス　ドイツ戦線に参戦。
1946年　終戦により帰還。

1946～47年　A·C·E 誌（アール　キュルチュール　エコノミー）。
1947～48年　オクシダン誌の図案下書人として働く。
1948年より二年間　ラ・ダンス誌を創立　支配人となる。
1948～50年　イタリー　スペインに旅行。
1952年　カラカアスとメキシコにて　フランス大使により計画された展覧会に出品。
1960年　絵画勉強のため日本より招待を受く。
1962年　サロン・ドートンヌ絵画装飾部の会員となる。
1963年10月　ニューヨークで行われた国際造型芸術会議のフランス代表となる。
1964年　シャステル　バルトール　ピオベール等とモナコで開かれた現代作家国際芸術大賞のための選抜展。

エコール　シュペリウール　ドリアンタシオン及アカデミー　ランソンの元教授。職業画家委員会の秘書。サロン・ドオトンヌ委員。造型と装飾の“古い箱”の元理事二科会の名誉会員。国際造型芸術連盟のフランス国内委員会事務局長。

展覧会

1949年　パリ　ギャルリー・ル・バール。パリ　ギャルリー　ドウーセ。
1948～51年　サロン・デザンデパンダンに出品。
1950年　パリ　ギャルリー・ル・バール。パリ　ギャルリー　アール　ヴィヴアン。ベルン　ギャルリー　マクソール。ジユネーヴ　ギャルリー・デ・ボザール。
1950～52年　サロン・デ・ジュンヌ　パントル。
1951年　パリ　ギャルリー　アール　ピクチュラル。
1951～52年　パリ　ギャルリー　サン　プラシッド。
1952年　パリ　アール　サクレ。
1952～55年　サロン・ド・メエ。
1953年　パリ　ギャルリー・ド・ベリイ。パリ　ギャルリー　シェイユロ。リモージュ二十世紀画廊。メッツ　サロン・デ・ボザール。パリ　現代作家展。
1953～55～57～64年　マントン　ビエンナーレ。
1954年　アレス　サロン・デ・ボザール。モロッコ　フランス美術展。ナンシイ　ミュウゼ・デ・ボザール。“ランコントル・ドクトーブル”。ナント　ミュウゼ・デ・ボザール。メッツ“レ　メートル・ド・レコール・ド・パリ”。
1954～56年　アングレーム　サロン・デ・ボザール。
1955年　パリ市立現代美術館　”現代芸術家展”“ラテンの地展”。ギリシャ　現代絵画展。オッフェンバックとミユニイヒにて“フランスの若い画家展”。ヴィシイにてフランス人の石版画展。サロン・コンパレゾンに出品。
1956年　ロート　ラ・ロシエル　ギャルリー。サロン・ド・ロマン。メルボルン　フランス美術展。パリ　ギャルリー　サン　ルイ。パリ　ギャルリー・ル・セルクル。パリ　ギャルリー　ムールグ。サントロペ　ギャルリー　デュ　ポール。ブリュッセル　ギャルリー・ド・グロート。

1957年　ストラスブール　ギャルリー　ランウェルラン。ダラス　ギャルリー　ヴァレイ　ハウス。パリ　ギャルリー　シャルパンティエ。マルセイユ　ミュウゼ　カンティニ。ピエンナーレ　パリ工芸博物館。
1957～58年　メキシコ。
1959年よりサロン・デ・チュイレリーに出品。ダラス　ギャルリー　ヴアレイ　ハウス。
1960年　パリ　ギャルリー・ド・ポシユ。
1961年　パリ　ギャルリー　シャル　パンテイエ　エコール・ド・パリ展。ロンドン　ライセスター　ギャルリー。サンフランシスコ　ポムロイ　ギャルリー。アメリカ　デトロイト　バークギャラリー。アメリカ　サンタバーバラ美術館。日本　東京都立美術館。サロン・ド・パリ。
1962年　ジュネーブ　ミュウゼ・ド・アテネ。ダラス　ギャルリー　ヴアレイ　ハウス。パリ　ミュウゼ　ガリエラ。ニューヨーク　マーブル　アーチ　ギャラリー。
1963年よりパリ　サロン・ダールサルに出品（ステンドグラス）。カナダにステンドグラス出品。マルセイユ　ギャルリー・ル・ソルスチス。

ステンドグラス

1963年　ロリアン　パリ　"生ける壁展"。ステンドグラスとアルミニウム建築。
1964年　パリ　ギャルリー　ヒユストン　ブラウン。ムユニッヒ。パリ　ギャルリードメック。メッツ　ヴェレーヌ　アン　アイエ教会のステンドグラス製作。

受賞

1948年　ヴェニス市賞。国家賞次席。
1950年　旅行奨学資金国家賞。
1957年　マントン　ビエンナーレ賞。

個人のコレクション

フランス　北アフリカ　英国　米国　イタリー　スイス　日本にて壁掛　各種装飾品　ガラス　モザイク　石版等。

美術館買上

パリ近代美術館。国立パリ市美術館。パリ　プティ　パレ美術館。パリ　リール・ド・フランス美術館。パリ　レンヌ美術館。アメリカ各地美術館。

準備

パリ　ギャルリー　ドメックにて個展。ナンシー　病院の入口の記念物。ナンシー大学　プールの装飾（ステンドクラス）。

BARON-RENOUARD

バロン・ルヌワール　ガッシュ　石版展

11月9日→14日　1965

日本橋画廊

中央区日本橋通3-1高島屋南口向い

NIHONBASHI GALLERY

1, 3-chome Nihonbashi-tori Chuo-ku Tokyo Tel. 271-5995・8626

デザイン＝国東照幸

印刷・製本＝(株)日本写真印刷

製作＝(株)求龍堂　Ko-126.40 11.0

© 1965 printed in Japan

東京・日本橋
髙島屋